



大会テーマ

『かかわりの再考 ～PSW の原点から精神保健福祉士の未来を探る旅へ～』

2020 年。新型コロナウイルス感染症が世界中に広がりました。今まで当たり前に出ていた生活が一変し、「新しい生活様式」の名の下、マスク着用・ソーシャルディスタンス等々、今ではそれが「当たり前」となってきました。日常生活・仕事・学校・療養生活等にも影響を与え、今なお不便な生活を強いられている状況もあります。

本来は 2020 年 11 月に第 36 回中四国精神保健福祉士大会として広島で開催する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の影響により次年度に「延期」という形となり、講師をご依頼させていただいた皆様、各県協会の皆様には多大なご迷惑をおかけすることになりましたこと、この場を借りてお詫び申し上げます。

その後、広島県協会内でも検討を重ね、新しい生活様式の中での開催方法を様々な形で議論を重ね、この度の開催を迎えることができました。ご協力いただきました方々に改めてお礼申し上げます。

これまでにはない新しい形の中四国大会開催となりましたが、参加される皆様にとって実りある機会となりますよう、実行委員一同、精一杯務めさせていただき所存です。

大会長 向井 克仁



【大会趣旨】

精神保健福祉士が国家資格となって 20 年が経過しました。年々 実践の場は拡大し、加えて法制度や施策の改定等によって、精神保健福祉士に求められる役割や期待も増えています。

これまで中四国大会広島大会では「かかわり」をテーマに据え、開催してきました。その中で、「PSW の実践」の根幹には、クライアントとの「かかわり」が存在し、日々の業務で「かかわり」を意識した実践の積み重ねが、最も大切であることを確認してきました。

しかし、法的な枠組みに組み込まれた業務の遂行が最優先される傾向が加速してしまい、その業務のみが PSW の実践として内外問わず認識されている感も否めない現状があります。先達の PSW が追い求め、築き上げ、大切にしてきた「かかわり」やアイデンティティは、国家資格化後どのように変化し、引き継がれてきているのでしょうか。専門職たる精神保健福祉士にとって、単なる世代間格差や経験年数だけでは済まされない『PSW としてのかかわり』の認識が、継承され実践されているとは言い難い現状にあります。

私たち精神保健福祉士は業務に追われる中で、かかわりを基盤にした実践ができていのか、改めて考えていく必要があると思います。加えてこのような現状の中で「PSW」から「MHSW」への名称変更や精神保健福祉士の養成課程の再考が検討されている現在、今大会では『PSW としてのかかわり』を再確認し、これからの精神保健福祉士として見据えていくべき未来と取り組む姿勢について再考する機会にしたいと考えています。今後、私たち自身がソーシャルワークの専門職として、精神保健福祉分野において“実践”を積み重ねていく。そんな未来を一緒に探っていきませんか。



[日 時] 2021(令和3)年 10 月 23 日(土)～24 日(日)

※今大会はオンラインでの開催となります。後日、初日のみオンデマンドで配信予定(日程未定)

[主 催] 広島県精神保健福祉士協会 第 36 回中四国精神保健福祉士大会実行委員会

[大会日程]

プログラム等詳細は現在鋭意準備中です！！

もうしばらくお待ちください。